

「ただ神によって生れる」

イザヤ書 第53章 1節～5節  
ヨハネによる福音書 第1章 9節～13節

説教 本庄侑子 伝道師

すべての人を照らすまことの光に照らされる時、神によって奇跡が起こります。私たちは、今、その奇跡の中にいるのです。

ヨハネによる福音書では、キリストを“光”と表現しています。闇は光に勝つことはありません。この光は全ての人を照らします。けれども、聖書は世に知られず、受け入れられなかったキリストにスポットを当てます。「あなたの事なんて知らない。」というような事を言われた事を思い出してみてください。キリストの生涯は、その様なものでした。愛されず、冷え切った生涯であったのです。

キリストは世の創造に関わった方でした。それなのに人々に拒絶され、十字架につけられ、殺されたのです。聖書は、そのようなむごい過去をイエス・キリストの要点として示すのです。

イザヤ書53章は苦難の僕(しもべ)としての救い主を描きます。それは、紀元前6世紀の事でした。全てが地に落ちたと思われた苦境の地。ここで、民は神が何かなさる事を求めました。神は何もして下さらないのですか？この叫びに対して神は預言者を通して語られました。僕として苦難を引き受けるという救いの道を示されたのです。

それは、私たちが想像し、願い求める救い主の姿とは異なる姿でした。威厳も無く、美しさも無い姿であり、侮られた人、悲しみの人でした。人々は彼を尊ばず、主は人々に捨てられた一生を過ごされたのです。十字架上で主は「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マタイによる福音書 第27章 46節)と究極の絶望の叫びを発せられました。この方のどこが救い主だと信じられるのでしょうか。

しかし、「まことの光があって、世にきた」(ヨハネによる福音書 第1章9節)と言います。ヨハネは“まこと”にこだわり、“まことの光”と言うのです。この方こそ、真実であるという主張があります。私たちの目を本当の問題からそらさせ、救われた気分させる偽りの光が、世に溢れているからです。

このアドヴェントは特に、闇に目を留めて過ごしています。私たちが生きる世界には、むごいといしか言いようの無いことが現に起こります。まことの光は、偽りの光がうやむやにする過酷な現実の中に立ち入り、闇と真剣に関わり抜くのです。それが、イエス・キリストのして下さった事です。主イエスは孤独を味わわれました。私たちが孤独だからです。まことの救い主は神にも人にも捨てられました。笑顔の裏に闇を抱える人々。孤独、絶望の中にいる人々。そのところに立ち入り、まことの救いを与える為に来られました。

神は、“神は何をしておられるのか”という激しい挑戦に答えられたのです。天の高みから手を振りかざすのではなく、苦難の僕として世に来られ、私たちの孤独、痛み、絶望、不条理、涙…の全てを味わい、ご自分のものとして下さいました。全ての闇を引き受け、罪無き者が十字架について下さいました。陰府にまで下されました。神はこれを満足されました。それがクリスマスに起こったことです。

悲しみと孤独の中で泣くしか無い時に“あなたを助ける”と、言って下さる主がおられます。私たちを取り巻き、私たち自身が抱える闇の中に来て下さり、涙も絶望もご自分のものとして死に、復活して下さいました。むごさの中に生まれたての御子がおられ、まことの光が輝いています。今や、闇は主が共にいてくださる光の場です。悲しみと孤独の中で、「私があなたと共にいる。」との声が聞こえます。クリスマスがあるので、私たちはこの世を生きて行けます。

主イエスは今も、まことの光として生きて働いておられます。私たちの心を照らして下さい。まことの光に照らされる時、まことの救いを見ます。私が遠ざけ、無視し、信じられなかった主イエスの顔に、まことの光を見出すのです。主イエスを信じる事が到底不可能であった孤独な人も主イエスを受け入れ、ただ神によって生まれ、神の子として歩み始めます。これは、神の意志によってなされるべきことです。イエス・キリストは、闇の中にお生まれになり、全ての人々を照らすまことの救い主です。

(記 説教要約奉仕者)